

児童の想像・空想に関する一研究

宇津木 貞 子

A study on the Imagination and Fantasy of children

Teiko UTSUGI

A literary review has been made by the author concerning the transition of conception on Imagination and Fantasy of children which has brought about the stabilized emotion in their life and has created an important position in the development of their thinking.

And then the author has studied the mental development of Imagination and Fantasy of children by the method of anthropomorphism. The result is as follows : Imagination and Fantasy of children are strongly influenced by mental developments, emotions and sex differences.

1. 0 序

想像 (imagination) や空想 (fantasy) ということばは日常語として、あるいは学術用語として広く用いられている。ところが、これらのことばを学術用語として用いる場合には、それらの概念を明確にしなければならないが、従来広く用いている心理学者の間にも一致した見解を見出すことは困難である。そこで、哲学者、心理学者および文学者が想像や空想の概念や機能をどのように理解しているかについて概観し、想像、空想の発達段階および児童の生活における意義を考察し、さらに想像、空想の実証的研究法について報告する。

2. 0 想像・空想の定義と機能

Epikuros の感覚説は、心像と知覚との間の全体的融合のもっとも直接的な範例を提供している。ここでは想像力を、一種の視覚と考えている。すなわち、物象の表面は、たえず微粒子を放出し、これが眼にあたって視覚を誘発し、それらの微粒子は、それを発する物象の形を保持し、そこで見る働きがわれわれに物象の性質を教える。さらに微粒子は、感覚器官をつらぬいて、精神に達し、そして対象が存在しないところでの心像の形成、それが想像力である。

Descartes および Descartes 学派においては、心像が身体の変様であると主張する。すなわち、共通感覚もまた、すでに外部感覚から離脱して、物体なしにやってきて、これら同じ形状ないし觀念を、あたかも蜜蠟におけるように幻想や想像のなかに印すために、一印章の役割を果す。そして、この想像は、まさしく身体の部分であって、そのさまざまな部分が互いに区別され、多くの形状で覆われるだけの大きさをもつと解釈している。これらの形状は、対象が感覚に与えられるように悟性に与えられるものであり、有機体の中に描かれた物質的形状で、魂と身体との結びつきを示すものである。また想像力は、想像しようとする対象を表象する場合には、悟性の一つの補助としての機能を持つもので、したがって身体の変様としての想像力とあわせて、想像力は二重の機能を

持つ。

Spinoza は、想像力は無道徳的な力であるとしている。また Pascal は、想像力を「誤謬と虚偽の主」として特性づける。しかし Pascal と Spinoza との相違は、Pascal が繊細の精神というものの重要性を発見している点で、事実の複雑な領域において、真理に到達するためには、その繊細さが認識の補助者たりうると考えていることにある。

Kant の認識論にあっては、想像の役割は、全く別のものになる。まず、Kant においては、想像は感性と悟性との間にかけられた橋である。認識の資料は感覚によって与えられ、その形式は悟性の先天的な総合によって与えられるが故に、これら二つの異質な源泉を結びあわす想像力は両者の性質とともに受けている。それは多様性であると同時に、多様性における秩序である。想像力は、その先験的な役割においては、先天性によって制約されている。それは思惟の本質的条件でありながら、ひとが感覚的多様を一対象までもたらし、それによって単なる経験判断を知覚判断に変えようとするかぎりにおいて、やはり悟性に強く従属するものなのである。

また、対象と主体との一致を表現する判断は、対象と主体のあいだに一合目的性を立てる美的判断である。対象の形と主体の認識機能との間のこの主観的な合目的性は、想像の大きな特性である。これによって、想像力は悟性の厳しい法則性をのがれ、自由となる。客観的認識の価値をもたぬ、自由な創造の領域が想像にひらかれるのである。そして想像力は、美的目的において、認識能力を生きづけ、精神の一状態の有する表現しがたいものを、言語、絵画、塑造芸術によって表現するところの、魂と魂とのあいだの交感の能力であるとしている。

以上、古典哲学は、Kant の時代にいたって、想像力に固有の領域を示し、理解と創意との間の区別を明確に設定している。

Alain (1927) は、心像に観念の最初の段階をみたがゆえに、心像をのがれてゆくもの、とらえがたいもの、人を欺くものと断じた。心像は、欺瞞そのものなのである。

Sartre (1936, 1940) は、知覚における対象は、いわば意識によって「出会われたもの」であることを観察し、想像機能の主要な性格は、それが創造的自発性だということにあり、意識は自己自身にその対象を与えるものである、としている。

Wundt (1907) は、想像とは、すべての精神の形造る作用であって、それが過去の単純な再生と、過去の経験要素とを結合して、または、これと直接の知覚要素とを結合して新しきものを生ずる創造の機能を総称している。

Adler (1927) の解釈によれば、子どもの想像は、子どもが上に位するもの、空間的に広大なもの、大きな数字、および超自然的な力の表象を偏愛するのは、自分が弱小であり、劣等であるという感情が、錯覚的自己拡大によって、これを補償しようとする無意識的欲求から来るものであるとしている。

Freud (1953) は、子どもの想像表象を、すべて性象徴であるという解釈を下しており、この場合、嫉妬欲、および殺害欲のコンプレックスが重要な役割を演じるのであるとしている。

Dexter (1943) は、想像は非現実の世界を扱ったり、創り出したりするような心的活動で、過去の知覚、その他の経験が再生されるという点においては記憶に似ているが、しかし、記憶は過去そのものを再現しようとする心的活動であるのに対して、想像は多くの経験を材料として、それをいろいろな組み合わせ、新しく再構成しなおす創作の活動であるとしている。また、思考は、再構成や創作という点で想像と似ているが、その結果の真偽を現実の世界で必ず検閲しようとする働きを含むので、この点、真偽に拘泥せず、自由で融通性に富み、論理性、矛盾、不合理などを問わぬ想

像とは区別される。したがって想像は、その心的活動が記憶や思考と似ているけれども、現実の世界に拘束されない、自由な創作活動という点で、独特の心的機能ということになると主張する。

戸川 (1957) は、想像は、先行経験を解体して新しい形に再構成する過程であるとする。すなわち、過去の経験の単なる再生、または、原経験そのままの再生と区別して、先行経験のまとまりを解体分離する過程と、それを新しい別の組み立てに再構成する過程と、この二つの過程からなる精神過程を想像とよんでいる。想像過程は、ある場合、無目的に進行する。すなわち、解体された過去の経験は、なんらかの目的に制約されることなしに再構成される。したがって、生活に対しきまった役割をもたないこのような想像は空想 *fantasy* とよばれる。特定の課題をもたず、虚心の状態にあると、いろいろな考えが心に出没往来するが、これは先行経験の単なる再生であるか、または課題をもたない、したがって、生活への役割を持たない単なる空想であるかのいずれかである。これに反して、ある場合には、先行経験の解体と再構成とが特定の方針をもって目的的におこなわれる。課題解決という明瞭な目的をもち、それに妥当であるように進行する。このような想像過程を、創造的想像 *creative imagination*、または、生産的想像 *productive imagination* とよんでいる。生産的想像は、生活に対しての大きな役割を持っている。第1に、それは文芸上、学術上の創作活動、あるいは発明の心理過程とくに重要である。第2に、生産的想像の過程は、生活行動における試行錯誤を省略する役割をもっている。すなわち、現実の行動に先だって、想像過程の中の行動を試行し、起り得べき錯誤を予見して、最初から錯誤のない行動を行なうことができる。

宮城 (1956) は、想像をまず、〈心像〉を新しくつくり出す場合のみをいう。創造的想像と同じであるが、時にこの他に、他人の想像に従う模倣的想像を含める事もある。つぎに、〈心像〉をつくること、すなわち現在、目前にないものを頭に浮かべる作用で、再生的想像とか、想像的記憶とかいう。そして、後者の意味に用いるのが適当であろうといっている。

恩田 (1957) は、想像の特性と機能を次のように述べている。

- ①想像は、未来や未知の経験に関係を持ち、非現実的に想像対象をつくり、それを発展させる。
- ②想像は、個性的に過去の経験にとらわれなくて、無限に展開する傾向がある。その点、自由性を持つが、統制がない。
- ③想像は、個人の要求や感情を表出する。その点、想像は個性的、主観的であり、非合理的な傾向を持つ。
- ④想像は、直覚的であり、未分化な全体的把握である。そして表象間には、必ずしも関係づけが行なわれていない。
- ⑤想像は、経験における既知と未知、特殊と一般とが整理されていない。素材が、より具体的に豊富である点がすぐれているが、まとまりがない。

Smith (1963) は、*fantasy* は、独創的な想像力から生まれるものであって、その想像力とは、五官で知り得る外界の事物から導き出す概念をこえた、より深い概念を形成する働きであるとしている。

このように、想像というのは、過去経験による記憶像を解体し、あるいはそれを単位にして、真偽に拘泥せず自由に融通性に富んだ創造的再生、または再構成していく心的能力である。そして、戸川が定義するように、過去経験の解体・再生・再構成の過程において、なんらの課題を持たず、あるいは、生活への役割を持たない独創的な想像力を空想 *fantasy* と呼ぶことができる。

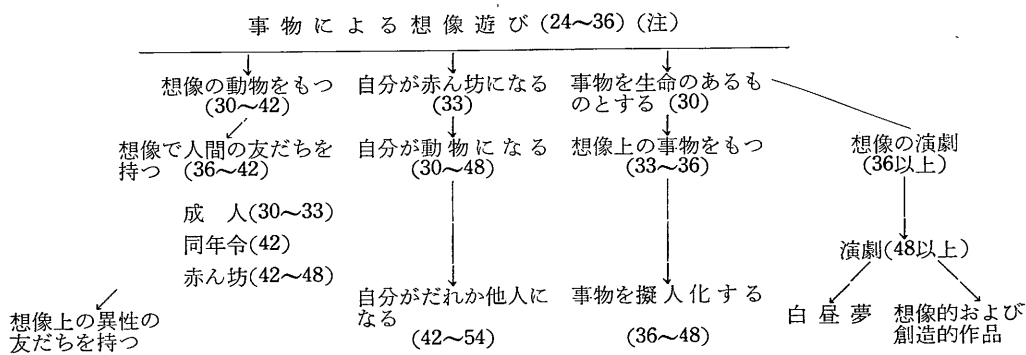
また、想像や空想は Dexter が述べるように、再生・創作的構成という点では思考や記憶と類似しているが、その結果の真偽を現実の世界で検閲しようとする働きをしない点で、これらの機能と

は区別される。

3.0 想像・空想の発達

2.0において、想像・空想の概念についてみてきたが、つぎに、想像や空想の発達について概観する。

Ames と Learned (1946) は、想像は四つの系統にそって発達してゆくとして、次のような発達系統図を提唱した。(Fig. 1)



(Fig. 1) 想像発達系統図 (注) () は月齢
(Ames, L. and Learned, J. 1946)

すなわち、最初24~36か月の子どもは、いずれも事物によるごっこ遊びで想像するが、その後、図のような四つの系統にそって発達していく。たとえば、想像の動物を遊び相手に持つようになってから後で、想像上の人間の友だちがあらわれ、それから異性の友達が想像でつくられるというのである。

Gesell (1940) は、2才児においては、何かを壁からとる真似をして、それを大人に渡そうとし、2才半になると、想像の友だちに興味を持ち始める。3才になると、空想の構成がしだいはっきりしたものになってくる。3才半では、子どもの想像生活がその頂点に達するようになり、子どもの活動といっそう密接に結びついてくる。4才では、子どもの想像生活は、二人またはそれ以上の子どもを含む、もっと芝居がかった社会的遊びへと変形する。また想像上の友だちは、毎日の生活にとって、前ほど重要ではなくなり、空想遊びは、ひとり遊びよりも、グループ遊びの方へと関係が深くなる。8, 9才のころまで想像上の生活が続くことがあるとしている。

Marky (1935) は、就学前の子どものことばと行動とを調査して、平均2才半の幼児は、2時間半の間に6.5件の空想的行動を表わすが、6才半には、同じ時間に26件に増加することを報告している。また、3才以下の子どもの想像的活動の大部分は、つぎの3段階にわけられるとしている。(1) 犬や無生物に話しかけるような擬人的活動。(2) 滑り台を汽車とよんだり、コップで水を飲むまねをしたりするような、材料をごっこ遊び式に使う活動。(3) 消火や入浴のような、ごっこ遊びの場面に入りこむ。またことばを分析した報告では、2才半の幼児のことばの1.5%は想像的なものであり、3才半から4才には8.7%に増加し、ある幼児では26%に達しているといっている。

成瀬は想像を3つの発達段階により示している。(1)想像のはじまり(模倣的想像)：想像活動の最初の徴候は、子どもが年長者たちの行動をまねる時にみられる。これは1才半ごろまでの時期

で、このころの想像活動はまだごくわずかで、しかも簡単な動作によって受動的・再生的に表現されるにすぎない。(2) ごっこ遊び(運動的想像)：ことばが使用できるようになると、模倣的、再生的想像ばかりでなく、創造的性格を帯び、想像活動はより豊かに、多様になる。これは2才ごろより小学校入学前の時期である。しかしながらこの期の想像はまだ動作や運動による段階である。(3) 心像的想像のめばえ：小学校入学のころから、想像はさらに新しい段階の過度期に入り、動作や外的表現のほか、過去経験にもとづく心像や表象の組み合わせをも加えて、内的にも想像しはじめることができるようになる。すなわち、運動的想像から、心像的想像への移行ないしは、両者の混在しているのが就学前後の児童の特徴である。

Ribot (1929) は、想像力の発達について、「想像力の発達曲線」Fig. 2 を示した。それによると、想像力は幼児期に飛躍的に発達し、児童・青年期以後は横ばい状態になる。そして児童・青年

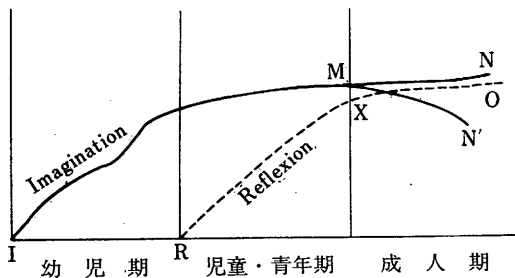


Fig. 2 想像力の発達曲線
(Ribot, T 1929)

になると、合理的推理力が発達してくる。そして、幼児期を支配していた想像力が、推理力の出現によって押えられる。MおよびXで想像力、推理力の発達は頂点に達し、想像力はMNのような横ばい状態で維持される場合と、MN'のように減退する場合に分かれる。多くの人の場合はMN'の方向に進む。XOと平行して維持されてゆく想像力MNは、合理的、論理的な形式を持ったものになる。そして、そこにおいて想像力と推理力は相互に浸透しあってゆく。

これらのことから、想像の発達は言語獲得以前と言語獲得後とで、その様相が大きく違っていることがわかる。さらに言語獲得後は、思考能力の発達、社会的経験とともに、より豊かに、複雑に、そして内面的な様相を呈してくる。そして、Ribot, T. が示すように、幼児期から児童期にかけて想像力は増大し、その想像力は合理的推理力と相まって、より抽象的な創造的思考へと発達する。

4. 0 想像・空想の子どもの生活における意義

以上想像および空想の概念、発達について概観したように、子どもの想像と空想を明確に区別することは困難である。空想は想像の一部であり、思考や記憶とも域を一にするものである。子どもにおいては特にその傾向が強い。子どもは直観的、具体的、全体的把握の未分化、主体と客体の未分化等の特徴をもっている。子どもの空想が純粋で、想像の一領域であるのに対して、大人の空想は、論理的な思考の時期にもかかわらず非合理的な思考形態をとるところに、Alain が指摘するように、空想が逃避、補償、不満などフラストレーションの解消のためのあらわれであり、病的なもののみ考えられる根拠がある。したがって、心理学的には、子どもの空想と、大人の空想はその性格が異なる。

Ruskin (1843) は、想像を (1) Associative imagination (総合的想像) (2) Penetrative imagination (洞察的想像) (3) Contemplative imagination (瞑想的想像) の三つに区分し、児童期における想像、空想の意義についてつぎのように論じている。

すなわち、総合的想像は、諸種の表象を結合して一観念を構成する力を有する想像であって、構

成された観念の内容の各部の相互関係は、非常に密接であり、一部が除去されるならば、全体の総合的調和は、たちまち破壊される。そして、この想像が真正であるためには、強烈な単純さと、調和と、絶対的な真理とを要求するものである。アンデルセンの童話は、大部分この想像に訴えるものである。すなわち、アンデルセンは子どもの日常の生活上の経験をつかみ、それに快活さと魅力とを具備させて、調和統一のある童話を作成しているのである。

洞察的想像は、事象の核心に徹して、その事象の内的真实性をみきわめようとする力で、客観的に感応する人自身の精神的感応によって、事象を解こうとするものである。この力は(1)～(3)の中でも最も重要なもので、子どもは、この力の練習によって、また運用によって洞察力や直観力を養成し、事物の精神的価値と理想的真性に対する愛と憧憬とを感じ、同時にそれを獲得せんとする欲求と、衝動とを起こすのである。ここにおいて、創作の態度において重要であるまじめさを獲得し、養成し、ひたすら真理の追求と自己完成に対する希望と愛欲との基礎を養うのである。また、この洞察的想像は、空想 (fancy) と対照的關係に立つ。子どもは空想を通じて事象の核心にわけ入ることはできない。なぜならば、空想は、ただ外部とのみ交渉するだけであるからだとしている。

瞑想的想像は、抽象的な物を具体的に解こうとする力、すなわち抽象的存在に現実性と堅実性とを賦与するところのものである。また、お話の前半を解釈して、後半にはこうなるであろうとして結合させる一面をもっている。子ども達は、この想像力を通じて、物語が物語るところのものの本質的意義をつかみ、物語の本当の使命を知るのである。すなわち、そこで観察力が養われる。観察力を養うことによって、観察の自由と、自己活動と、自己表現の三つの価値を認識し、単純な、清浄な、神々しい創作力を練っていくことになるとしている。

要するに、この三つの想像は、子どもが真に物語の本質を理解することによって、子どもの持つ純粋な心性と、真理の追求、自己完成への意志とを導き発展させるに重要な補助をなすものであり、さらに、物語の創作にあたって必要欠くべからざる要素であると主張している。

山下 (1955) は、社会性の芽生える年齢になると、たとえば一人子や一人子に似た境遇にある子どもに「想像の友達」があらわれ、子どもはその形のない友達に、全く本当の友達と同じように話しかけたりすることを指摘している。これは現実の生活で友達が与えられないことの代償として生まれるものであり、3、4才で現実の友達が与えられることによって「想像の友達」は消失し、社会性の芽は発展するのである。すなわち、想像は子どもの社会性の芽生えと、発達に一つの先導的役割を果たす手がかりとなるものである。

また、北見 (1967) は、想像の性格形成への影響について、想像は未来への希望に生きる子どもにとっては、想像生活は成長そのものの現われであり、子どもがそれぞれの発達段階での欲求や欲求不満を想像生活の中で充足したり、解消したりするあり方は、安定感の成立や性格形成のあり方の基礎をなすといっている。

Jersild (1960) は、子どもの想像活動が、子どもの精神生活、情緒生活、社会的発達さらに運動発達にとっても重要な役割を演ずることを指摘する。すなわち、想像によって時間と空間の限界を越え、ふだん到達できないような人物、物事を取りあつかったり、また、現実の危険や困難に直面することなく、想像によって欲求や願望、また、希望や恐怖をほしいままにすることができるのである。また、ごっこ遊びなどから他の子どもとの接触や役割を獲得し、ぶらんこや自転車に乗ったりすることから運動を練習するような場面が生ずるのである。

以上のように子どもの想像・空想は、その非現実的、一貫性のなさにもかかわらず、素材の豊富

さや、現実に拘泥せず自由に思考をめぐらせることができることによって、子どもの知的創造の土壌となり、さらに人格形成の基礎となるところに価値がある。

5. 0 擬人法による想像・空想の実験的研究の一試案

〔1〕 目 的

いうまでもなく、想像、空想というのは、きわめて抽象的、流動的な心的機能である。したがって、これらの心的機能を実証的に研究していくためには、多くの問題が横たわっている。Ribot が指摘するように、幼児期から青年期にかけて想像力は、思考と併行して発達するもので、それらの由来は同一起源によるものである。

本研究は、子どもの思考および言語の構造的な側面を分析することによって、子どもの思考過程の一段階である想像、空想の過程、およびそれらの本質を明らかにすることを目標にした研究の第一歩である。

今回は、想像過程を分析するため、子どもの思考の特徴である自己中心性における animism の特色を示す擬人法によって、表出された言語の形態、内容、構造などの特徴を、その発達の傾向および性差との関連において分析し検討した。

〔2〕 方 法

(1) 被験者：幼児は青梅市立幼稚園児と都内私立幼稚園児。児童は都下久留米第一小学校、板橋区立、大田区立小学校2年、4年、6年の児童である。被験者選択の要因として、①性別、②知能、③同胞構造をとり、それぞれの被験者数は Table 1 に示した。被験者総数は152人である。なお、Table 1 におけるMは男子、Wは女子を示し、知能の high group は、幼児の平均 IQ 147.6、児童の平均偏差値は 67.6、low group は、幼児の平均 IQ 87.7、児童の平均偏差値 45.7 である。

学年別	同胞構造 知能 性別	一人子 (MorW)		同性構造2人子 (MMorWW)		異性構造2人子 (KMorKW)		合 計
		high	low	high	low	high	low	
		幼児	M	3	3	3	3	
	W	3	3	3	3	3	3	18
2年	M	3	2	4	4	3	3	19
	W	3	3	3	4	3	3	19
4年	M	4	4	3	3	3	3	20
	W	3	5	3	3	3	3	20
6年	M	3	4	3	4	3	3	20
	W	4	0	4	3	3	4	18
								152

Table 1 被 験 者

カブトムシ、チューリップ、木、サクラ、キク)

- ・ B領域 (形ないものを形あるものに視覚化し、生命化するもの) ——水、火、雲、空気
- ・ C領域 (形あるもので、生なきものを生命化するもの) ——東京タワー、リンゴ、カメラ、チョコレート、舟、怪獣、バナナ、幼稚園(小学校)、ケーキ、テレビ、富士山、自動車、ニンジン、ガム、電車

(2) 実験方法：①個人面接により、A, B, Cの3領域からなる各質問刺激語について「もし——(刺激語)が人間になったら、どんな人間になると思いますか」という課題を与え、応答を求め記録した。

②実験材料は、次に示す3領域からなる質問刺激語40語を用いた。

- ・ A領域 (人間と類比、もしくは相似を基礎としているもの) ——イヌ、金魚、チョウチョ、ニワトリ、カエル、サル、クジラ、ウサギ、カラス、タコ、ハチ、ヘビ、ハクチョウ、キツネ、カメ、ハト

(3) 実験期日：昭和44年10月初旬から11月初旬にかけて、おのおのの幼稚園、小学校で実施。

〔3〕 反応の分析方法：

得られた反応は、次の各反応因に分類される。

(1) 反応決定因 (F：形態反応, M：運動反応, C：色彩反応, E：情動反応)

これは知的、情緒的側面から想像を分析しようするものである。

Fに反応するという事は、主に視覚的なイメージによって刺激語、または人間を把握し、その両者を関連づけているということである。すなわち刺激、人間を二次元的な側面からのみ連想していることを示す。比較的、平面的な想像である。Mに反応するという事は、Rorschachによると、知能の生産性、連想の豊かさ、新しい連想を結びつける能力につれてその反応数は増加するといわれている。すなわち刺激、および人間を単にその形態のみで把握するのではなく、三次元的な広がりの中で把握し、連想をおこなうのである。したがって、その連想は自由な広がりを持ち、より豊かな想像をもたらす。Cに反応するという事は、視覚的イメージによる連想であり、Rorschachの分析によって明らかであるように、情緒的側面との関連が強い。感受性の豊かな、さらに表現力のある者にC反応が多い。Eに反応するという事は、視覚的イメージのみならず、刺激語、または人間の持つ内面的特質をも理解し、感情の分化にしたがって、社会的、道徳的な側面をも総合したイメージを連想しているということを示している。

(2) 人物化反応因 (H：全体として把握された人間像 (H)：描画、漫画、物語などの人物として把握された人間像 AH：半人半獣のごとき完全に人物化されない場合 AO：全く刺激語からぬけきれず、人物化されない場合)

これは擬人化の度合と、想像の方向、想像の豊かさを見ようとするものである。

(3) 文章構造による分類 (㊸：自立語のみの反応 ㊹：自立語付属語 ㊺：二つ以上の自立語 ㊻：二つ以上の自立語+付属語の反応)

これは、反応語数、反応の文の構成をみようとするものである。

(4) 形容詞による分類 (a⁺：抽象度の高い形容詞 a：a⁺以外の形容詞)

これは、形容詞の抽象度によって、想像の質的傾向を見ようとするものである。

なお、これらの各々の要因の分類は研究者2名が行ない、集計および検定はコンピューターを用いた。

〔5〕 結果と考察

分析1：Table 2 から Table 3 に示すように、擬人法によって表出された反応に、発達の傾向が見られるかどうかを分析した。

(1) Table 2 に示したように、反応決定因において、F反応は年齢の上昇とともに出現率は減少し、M反応、E反応は増加する傾向を示している。C反応は、2年生、4年生において出現率が高くなっている。要するに、幼児の場合、視覚的なイメージによって具体的な反応を示し、年齢の増加とともに、より知的に人間性の内面をも総合するような、多面的な反応を示している。このことは、子どもの思考が直観的思考から具体的操作、さらに形式的操作の段階へと発達するというPiagetの発達説と一致している。したがって、子どもの想像は、Kantもいうように、より豊かな、知的なものへと年齢的に発達することを示している。C反応が、2年生、4年生で高くなっているのは、この時期が思考形態の重複する時期であり、情緒的变化も大きく、このことから、情緒的側面との関連が強い色彩的な反応が高くなっていると考えられる。

		幼 F	児 F %	2 F	年 F %	4 F	年 F %	6 F	年 F %	Total
[A]	F	408 (49.9)		391 (40.6)		509 (45.6)		268 (28.1)		576
	M	240 (29.3)		315 (32.7)		346 (31.0)		311 (32.5)		1,212
	C	40 (4.9)		106 (11.0)		118 (10.6)		31 (3.2)		295
	E	130 (15.9)		150 (15.6)		143 (12.8)		346 (36.2)		769
	Total	818		962		1,116		956		1,852
[B]	F	97 (63.4)		77 (42.5)		93 (45.4)		55 (30.9)		322
	M	35 (22.9)		43 (23.8)		59 (28.8)		46 (25.8)		183
	C	7 (4.6)		27 (14.9)		27 (13.2)		2 (1.1)		63
	E	14 (9.2)		34 (18.8)		26 (12.7)		75 (42.2)		149
	Total	153		181		205		178		717
[C]	F	338 (58.6)		324 (44.9)		353 (45.5)		227 (32.6)		1,242
	M	149 (25.8)		191 (26.5)		235 (30.3)		187 (26.8)		762
	C	35 (6.1)		111 (15.4)		99 (12.8)		41 (5.9)		286
	E	55 (9.5)		95 (13.2)		88 (11.4)		242 (34.7)		480
	Total	577		721		775		697		2,770

Table 2 反応決定因の発達の傾向

		幼 F	児 F %	2 F	年 F %	4 F	年 F %	6 F	年 F %	Total
[A]	H	543 (76.6)		504 (61.9)		592 (71.2)		683 (89.3)		2,313
	(H)	24 (3.4)		9 (0.1)		7 (0.8)		20 (2.6)		60
	AH	112 (16.1)		271 (33.3)		225 (27.0)		46 (6.0)		654
	AO	27 (3.9)		30 (3.7)		8 (1.0)		16 (2.1)		81
	Total	697		814		832		765		3,108
[B]	H	98 (75.4)		114 (74.5)		122 (77.2)		134 (90.5)		468
	(H)	6 (4.6)		9 (5.9)		9 (5.7)		6 (4.1)		30
	BH	20 (15.4)		20 (13.1)		19 (12.0)		3 (2.0)		62
	BO	6 (4.6)		10 (6.5)		8 (5.1)		5 (3.4)		29
	Total	130		153		158		148		589
[C]	H	387 (80.0)		438 (76.0)		474 (79.4)		517 (92.0)		1,816
	(H)	19 (3.9)		20 (3.5)		5 (0.8)		22 (3.9)		66
	CH	52 (10.7)		86 (14.9)		96 (16.1)		9 (0.2)		243
	CO	26 (5.4)		32 (5.6)		22 (3.7)		14 (2.5)		94
	Total	484		576		597		562		2,219

Table 3 人物化反応因の発達の傾向

		幼 F	児 F %	2 F	年 F %	4 F	年 F %	6 F	年 F %	Total
[A]	㊸	186 (19.3)		16 (1.6)		14 (1.3)		62 (6.2)		278
	㊹	63 (6.5)		10 (1.0)		11 (1.0)		15 (1.5)		99
	㊺	166 (17.3)		70 (7.2)		43 (4.1)		74 (7.4)		353
	㊻	547 (56.9)		875 (90.1)		990 (93.6)		846 (84.9)		3,258
	Total	962		971		1,058		997		3,988
[B]	㊼	23 (14.3)		3 (1.6)		5 (2.7)		22 (10.6)		53
	㊽	8 (5.0)		3 (1.6)		0 (0)		4 (1.9)		15
	㊾	25 (15.5)		8 (4.3)		11 (6.0)		9 (4.3)		53
	㊿	105 (65.2)		173 (92.5)		168 (91.3)		173 (83.2)		619
	Total	161		187		184		208		740
[C]	㊿	121 (20.2)		10 (1.4)		14 (2.0)		32 (4.4)		177
	㊿	30 (5.0)		9 (1.3)		3 (0.4)		11 (1.5)		53
	㊿	86 (14.4)		46 (6.6)		30 (4.3)		37 (5.1)		199
	㊿	361 (60.4)		635 (90.7)		653 (93.3)		647 (89.0)		2,296
	Total	598		700		700		727		2,725

Table 4 文章構造の発達の傾向

		幼 F	児 F %	2 F	年 F %	4 F	年 F %	6 F	年 F %	Total
[A]	a †	0 (0)		2 (0.2)		15 (2.1)		43 (7.3)		60
	a	338 (100)		817 (99.8)		708 (98.0)		550 (92.7)		2,413
	Total	338		819		723		593		2,473
[B]	a †	1 (1.9)		1 (0.6)		2 (2.0)		17 (13.1)		21
	a	53 (98.1)		159 (99.4)		99 (98.0)		113 (86.9)		425
	Total	54		160		101		130		445
[C]	a †	2 (0.9)		1 (0.2)		9 (1.8)		8 (1.7)		20
	a	221 (99.1)		656 (99.8)		462 (98.3)		462 (98.3)		1,828
	Total	223		657		471		470		1,848

Table 5 形容詞描象度の発達の傾向

(注) *** P < .01
 ** .01 < P < .05
 * .05 < P < .10

(2) Table 3 によると、人物化反応因において、H反応は6年生が最も高い出現率を示し、(H)反応は6年生と幼児が高くなっている。また、AH (BH, CHも含む) 反応, AO (BO, COも含む) 反応は、他の学年にくらべて6年生で著しくその出現率が低くなっている。これは6年における思考が、形式的操作の段階となり、課題の解決、すなわち擬人化することが、他の学年よりも忠実におこなえるということを示している。(H), AH (BH, CHも含む) 反応が、想像の方向と質を示すと考えることは、Rorschach においても指摘されている。この点から、(H)およびAH反応を考察すると、2年生、4年生において出現率が最も高く、ついで幼児となり、6年はいちじるしくその出現率は低くなっている。したがって、2年生、4年生は豊かな表現力と想像力を持っているといえる。6年においては、想像ということよりも、課題解決への方向、すなわち、Ribot のいうReflexion の発達にともない、より知的、合理的推理力を増しているといえる。また、人物化反応因において、B領域の(H)反応が他の領域にくらべて、2年生、4年生で高くなっていることが注目される。

(3) Table 4 によると、文章構造の側面からは、㊸, ㊹, ㊺反応は幼児にその出現率が高く、高学年になるにしたがって減少している。㊻反応は、2年生、4年生が最も高い出現率を示している。要するに、幼児においては単発的な反応が多く、年齢の上昇とともにまとまりのある言語的表出をしている。反応決定因において、2年生、4年生は色彩反応が高く、その想像の豊かさを示したが、文章構造においても言語的表現力の豊かさを示している。

(4) Table 5 によると、形容詞抽象度の測面からは、その出現率は全体的に少ないが、年齢の上昇につれて高くなっている。要するに、想像の言語的反応は年齢の上昇とともにより抽象的になる。したがって想像の内容もより深く、抽象的になるといえる。

分析2：つぎに Table 6 から Table 9 に示すように、擬人法による想像の表出に性差がみられるかどうかについて分析する。

(1) Table 6 によると、反応決定因においてF反応は、男子と女子の間にほとんど差が見られず、M反応は、男子が女子より高い出現率を示している。C反応、E反応は、女子が男子より高い出現率を示している。このことから、男子は女子より、より知的な想像をおこない、女子は情緒的な想像をしていることがわかる。

(2) Table 7 によると、人物化反応因においては、H反応は女子が男子よりやや高い出現率を示し、(H)、AH反応を総合してみると、男子が女子より高い出現率を示している。このことから、男子は女子よりも、質的に変化に富んだ想像をすると考えられる。

(3) Table 8 によると、㊸反応は女子に出現率が高く、㊶、㊷、㊸反応は男子が高くなっている。要するに、女子はよりまとまった構文を用いて反応し、男子はその表出方法が断片的であ

		F M %	F W %	Total
[A]	F	827(41.6)	749(40.3)	1,576
	M	695(35.0)	517(27.7)	1,212
	C	134(6.7)	161(8.6)	295
	E	332(16.7)	437(23.4)	769
	Total	1,988	1,864	3,852
[B]	F	164(45.3)	158(44.5)	322
	M	111(30.7)	72(20.3)	183
	C	23(6.3)	40(11.3)	63
	E	64(17.7)	85(23.9)	149
	Total	362	353	717
[C]	F	638(45.0)	604(44.6)	1,242
	M	447(31.5)	315(23.4)	762
	C	123(8.7)	163(12.0)	286
	E	209(14.8)	271(20.0)	480
	Total	1,417	1,353	2,770

Table 6 反応決定因における性差

		F M %	F W %	Total
[A]	H	1,163(72.1)	1,150(76.9)	2,313
	(H)	29(1.8)	31(2.1)	60
	AH	369(22.9)	285(19.1)	654
	AO	52(3.2)	29(1.9)	81
	Total	1,613	1,495	3,108
[B]	H	242(78.1)	226(81.0)	468
	(H)	12(3.9)	18(6.5)	30
	BH	35(11.3)	27(9.6)	62
	BO	21(6.9)	8(2.9)	29
	Total	310	279	589
[C]	H	896(77.6)	920(86.4)	1,816
	(H)	31(2.7)	35(3.3)	66
	CH	164(14.2)	79(7.4)	243
	CO	63(5.5)	31(2.9)	94
	Total	1,154	1,065	2,219

Table 7 人物化反応因における性差

		F M %	F W %	Total
[A]	㊶	213(9.9)	65(3.5)	278
	㊷	66(3.1)	33(1.8)	99
	㊸	198(9.2)	155(8.4)	353
	㊹	1,667(77.8)	1,591(86.3)	3,258
	Total	2,144	1,844	3,988
[B]	㊶	21(5.4)	32(9.0)	53
	㊷	7(1.9)	8(2.3)	15
	㊸	33(9.5)	20(5.7)	53
	㊹	326(84.2)	293(93.0)	619
	Total	387	353	740
[C]	㊶	128(8.8)	49(3.9)	177
	㊷	37(2.5)	16(1.3)	53
	㊸	107(7.3)	92(7.4)	199
	㊹	1,203(81.4)	1,093(87.4)	2,296
	Total	1,475	1,250	2,725

Table 8 文章横造における性差

		F M %	F W %	Total
[A]	a †	21(1.7)	39(3.2)	60
	a	1,219(98.3)	1,194(96.8)	2,413
	Total	1,240	1,243	2,473
[B]	a †	7(3.3)	14(6.1)	21
	a	207(96.7)	217(93.3)	424
	Total	214	231	445
[C]	a †	10(1.2)	10(1.0)	20
	a	851(98.8)	977(99.0)	1,828
	Total	861	987	1,848

Table 9 形容詞抽象度における性差

る。

(4) Table 9によると、a⁺反応は女が男子より高出現率を示しているが、B領域、C領域とも有意差が認められず、相関も低い。

6. 0 結 論

以上のような実験の結果から、児童の想像・空想について、つぎの結論に達した。

(1) 擬人法によって得られた想像・空想の発達の傾向は、年齢の上昇とともに具体的、視覚的な想像から、知的、生産的、総合的な想像をおこなうようになる。すなわち、想像は自由な広がりを持っているが、子どもの思考の発達や、生活経験の影響を受ける。

(2) また、擬人法によって言語表出された反応から、各年齢において想像の方向が異なることが明らかになった。すなわち、幼児においては、より視覚的な image を持って擬人化をおこない、その想像は比較的単純である。2年生、4年生は色彩的な反応が他の年齢よりも多く、現実を超越した、自由な連想をおこなっている。6年生は、現実の人間性、社会的地位などの視野から想像をしている。

(3) 想像・空想には性差が見られ、男子は女子よりも合理的、知的な想像をおこない、女子は、より情緒的な想像をおこなう。

(4) 擬人法によって子どもの想像・空想を実験的に検証してきたが、実験法についてつぎのような問題点を見出した。①B領域では子どものより抽象的な思考を必要とする領域であるが、刺激語が少なかったため、明確な結果が得られなかった。②分析法にも種々問題点があるが、構造的側面のみならず、子どもの反応の一つ一つについて、内容等のさらに詳細な分析が必要であって、これらの点について今後さらに検討してゆくなれば、擬人法によって子どもの想像・空想の質的構造の分析が可能だと考えられる。

付記：本研究にあたり、御指導いただきました日本女子大学阪本一郎教授・山室静教授、また資料の分析にあたって御指導いただきました本学島田俊秀助教授に深く感謝の意を表します。

参 考 文 献

- (1) Adler, A. The practice and theory of individual psychology, New York ;Harcourt, Brace, 1927
- (2) Alain 桑原武夫訳 芸術論集, 岩波書店, 1941.
- (3) Ames, L. B. and Learned, J. Imaginary Companions and Related Phenomena. Journal of Genetic Psychology, 1946, 69, 147—167.
- (4) Arastel, J. D. Creativity and Related Processes The Young Child : A Review of the Literature. The Journal of Genetic Psychology, 1968, 112, 77—108.
- (5) Bartz, W. H. and Looft, W. R. Animism Reviewed. Psychological Bulletin, 1969, 77, 1—19.
- (6) Dexter, E. What is imagination? The Journal of Genetic psychology, 1943, 28
- (7) Dunker, K. 小見山栄一訳 問題解決の心理, 金子書房, 1952.
- (8) Freud, S. General Introduction to Psychoanalysis. New York : Perma Books, 1953.
- (9) Flavell, J. H. The Development Psychology of Jean Piaget. Van Nostrand company, INC. 1967.
- (10) Gesell, A. et al. The First Five years of Life. A Guide to the Study of the preschool child, New York : Harper, 1940.

東京家政大学研究紀要第11集

- (11) Golann, S. E. Psychological study of creativity. *Psychological Bulletin*, 1963, 60, 548—565.
- (12) 波多野完治編 ピアジェの発達心理学, 国土社, 1965.
- (13) Jersild, A. H. *Child Psychology*. 5 ed. Prentice-Hall, INC. 1960.
- (14) Jeanne, B. 原享吉訳 想像力, 白水社, 1956.
- (15) 北見芳雄 想像の精神分析, 児童心理, 第21巻10号, 金子書房, 1967, 43—47.
- (16) 柱広介 想像生活と人間形成, 児童心理, 第21巻10号, 金子書房, 1967, 24—33.
- (17) 片口安史 ロールシャツハテスト 心理診断法詳説, 牧書店, 1966.
- (18) Marky, F. V. Imagination. *Psychological Bulletin*, 1935, 32, 212—236.
- (19) 松村武雄 童話および児童の研究. 培風館, 1954.
- (20) 松村武雄 児童教育と児童文芸. 培風館, 1924.
- (21) 宮城音弥 岩波小辞典 心理学 '想像'. 岩波書店, 1961.
- (22) 恩田彰 創造性の心理学的基礎についての研究 (第II報). 東洋大学紀要, 第十集, 1957.
- (23) Piaget, J. 大伴茂訳 表象の心理学. 黎明書房, 1969.
- (24) Piaget, J. 大伴茂訳 臨床児童心理学 I—III. 同文書院, 1959.
- (25) Ribot, T. *Essai sur l'émagination Créatrice*. Alcan, Paris, 1929 [文献(31)による]
- (26) Ruskin, J. *Modarn Painters*, 1843—60.
- (27) Sartre, J. P. 平井啓之訳 想像力. 人文書院, 1957.
- (28) Sartre, J. P. 平井啓之訳 想像. 人文書院, 1957.
- (29) Smith, L. H. 石井桃子訳 児童文学論. 岩波書店, 1963.
- (30) Symonds, P. M. Implication of Fantasy for Education. *Elementary School Journal*, 1949, 49, 273—277.
- (31) 滝沢三千代 子どもの想像と想像. 児童心理, 第21巻51号, 金子書房, 1967.
- (32) 戸川行男 心理学事典 '想像'. 平凡社, 1957.
- (33) Vinacke, W. E. *The Psychology of Thinking*. New York: McGraw-Hill INC, 1952.
- (34) 矢田部達郎 思考心理学 1—4. 培風館 1948—1959.
- (35) 吉田足日 児童文学の思想. 牧書店, 1965.
- (36) 山下俊郎 幼児心理学. 朝倉書店, 1963.